

聖書：コリント人への手紙第一 10：1～6

説教題：私たちを戒める実例

日時：2022年8月14日（朝拝）

コリント教会のある人々は、自分たちはもう霊的な高みに達したと思っていたようです。手紙の冒頭、1章5節で「あなたがたはすべての点で、あらゆることばとあらゆる知識において、キリストにあって豊かな者とされました」とパウロが述べていたように、確かにコリントのクリスチャンたちにはことばや知識において特別な賜物が与えられていました。しかし彼らはそのことで高ぶり、他の人々を見下し、弱い人々をつまずかせていました。そんな彼らにパウロは前回の9章24～27節で「あなたがたも賞を得られるように走りなさい」と言いました。ゴールを見失って今ある状態にとどまっていたてはならない。クリスチャン生活とは一等賞を取るためにゴールを見つめて自分をコントロールし、一生懸命取り組む人のようであればならない。精一杯努力して日々精進するような人でなければなりません。あのパウロもそうでした。それは「自分自身が失格者にならないようにするためです」と最後の27節で語りました。私たちはこれを聞いて、いくら何でもパウロが失格者になることはないのではないかなと思うかもしれません。彼がそうだったら、私たちみんながそうになってしまう。だからパウロが失格者になることはあり得ないと。そしてさらに、この私もまあ大丈夫ではないか。一位になって特別主から誉められることは難しいとしても、ゴールにはたどり着くのではないか。まさか失格者にはならないのではないか。そう考えているかもしれません。しかしパウロは10章前半で恐るべき実例を示します。失格者にならないようにという懸念は、非現実的なものではありません。

パウロは10章1節で「兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません」と言います。これから語られることは歴史的な事実としてはコリント人たちも知っていたと思われる。しかしその重要性を心に留めてほしいとパウロは訴えます。そしてパウロは「私たちの先祖は」と語り始めます。まず注目したいのは荒野を旅した旧約のイスラエルの民を指して「私たちの先祖」と言われていることです。この場合の「私たち」とは誰でしょう。もしコリント教会の会衆がみなユダヤ人だったら、旧約のイスラエルを指して「私たちの先祖」と表現するのは理解できます。しかしコリント教会は他の多くの異邦人世界に打ち立てられた教会と同様、異邦人主体の教会でした。その異邦人主体の教会が旧約のイスラエルを「私たちの先祖」と呼んでいます。

これは何を意味するのでしょうか。それは新約の教会は旧約のイスラエルと同一線上で考えられているということです。もし旧約のイスラエルを新約の教会と質的にいくらかでも異なるものとパウロが考えていたら、旧約のイスラエルを「私たちの先祖」とは言わず、もう少し突き放した言い方をしたはずで、しばしば多くの人々は新約の教会と旧約のイスラエルを質的に異なるものと考えています。旧約のイスラエルは民族的・国家的なものであるのに対し、新約の教会はただ信仰によって成り立つ霊的なものであると。新約の教会こそ純粋で聖い共同体であるのに対し、旧約のイスラエルはそれよりは一段低い、より肉的な集団であると。しかしパウロは旧約のイスラエルをそのように新約の教会から区別してはいません。むしろ旧約のイスラエルを「私たちの先祖」と呼びます。つまり旧約のイスラエルと新約の教会は一体であって連続していること、同じ一つの神の民であることを意味しています。パウロはローマ人への手紙 11 章 17 節で、異邦人の教会は旧約の神の民であるイスラエルの上に接ぎ木されたという表現をしています。新約の教会は旧約のイスラエルの上にそのまま加えられたのです。旧約のイスラエルは新約の教会の先祖です。ですから私たちは新約の教会を特別に持ち上げて、旧約のイスラエルをより肉的で劣った集団と見下してはならないのです。新約の教会をもし霊的と表現するなら旧約のイスラエルもそれに劣らず霊的です。逆に霊的であるイスラエルに様々な失敗や罪が見られるなら、それは新約の私たちにも同じようにあり得ることと思わなければなりません。

さてでは私たちの先祖である旧約のイスラエルから学ぶべきことは何でしょうか。パウロは 1 節で「私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通過して行きました」と言います。これらはそれぞれ主が昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らとともに進まれたこと、またあの紅海で海が真っ二つに分かれてイスラエルがその間を渡って行った出来事を指します。イスラエルはこうしてエジプトでの奴隷状態から解放され、主の民として取り分けられて、主にこそ従う新しい歩みへと出発して行きました。なぜパウロがこのことを取り上げたかは 2 節に行くと分かります。イスラエルはこうして「雲の中と海の中で、…バプテスマを受けた」と言われています。なぜ 1 節で火の柱のことが言われなかったかがここから分かります。雲と海が取り上げられたのは、いづれも水と関係するからです。「モーセにつくバプテスマ」と表現される祝福の中を歩んだことを浮き彫りにするため、バプテスマの水と関係する雲のみを取り上げたと考えられます。

ところである人はここから、やはりバプテスマは全身を水の中に浸す浸礼であるべきではないかと主張します。2 節に「雲の中と海の中で」バプテスマを受けたとあります。ですからやはり水に全部覆われること、その中に没入させられるべきことをこれは示しているのではないかと。しかしここに浸礼の根拠を求めるのは無理があると言わざるを得ません。なぜならイスラエルはここで誰も全身水浸しにはなっていないからです。水のしぶきくらいは紅海を渡る時、かかったかもしれませんが、全身水の中に沈められるという経験はしていません。ましてや浸礼派の人たちが主張するように、キリストとともに葬られ、キリストとともによみがえることを象徴する動作はここでなされていません。それにもし洗礼の方法がここで言われているとすると、幼児洗礼が支持されることになります。大人だけではなく、小さな乳幼児も、「雲の中と海の中」を通りました。であればどうして幼児に洗礼を授けることを控えるべきでしょう。これは浸礼を主張する人たちにとって都合の悪いことです。ですからここからそういうことを言おうとすることには無理があります。

パウロはここでこのようなイスラエルの経験を「モーセにつくバプテスマ」と言っています。これは新約聖書で、たとえばガラテヤ書 3 章 27 節で「キリストにつくバプテスマ」と表現されていることに合わせた言い方なのでしょう。キリスト教洗礼はもちろんキリストにつくバプテスマしかありません。しかしモーセは旧約時代において、後に来るキリストを指し示す仲保者的存在であり、救い手でした。その彼にイスラエルは確かに結び付きました。そしてそのことを通して、彼らは「雲の下にいる」とか「海を通って行く」という言葉に示されている神の特別な守りや配慮、また神の救いのみわざにあずかりました。パウロがこれによって言いたいことは何でしょう。それは私たちの先祖である旧約のイスラエルも新約のバプテスマに対応する豊かな恵みと祝福にあずかっていたということです。そして強調されているのは「みな」という言葉です。この恵みを受けた人と受けなかった人がいたのではありません。彼らは全員、この恵みにあずかりました。みな、言うならば洗礼の祝福にあずかったのです。

もう一つパウロが取り上げているのは 3~4 節にある霊的な食べ物と霊的な飲み物です。先の出来事が新約のバプテスマに関係するなら、こちらは何に関係するでしょう。それはすぐ想像できますように聖餐の恵みです。そしてパウロが言いたいことは、旧約のイスラエルも今日の聖餐に対応する養いを受けていたということです。まず 3

節の「靈的な食べ物」とは何でしょう。これは毎日天から降ったマナを指すと考えられます。「靈的な食べ物」と言われているのは、これが天から与えられたものであって、この世的なものではないこと、あるいは目に見える物質的なもの以上の靈的な意味を持つことを指すのでしょう。ではもう一つの「靈的な飲み物」とは何でしょうか。

「靈的な岩から飲んだ」と言われていますから、神が岩から水を湧き出させ、民に飲ませた出来事を指すと考えられます。出エジプト記 17 章 6 節や民数記 20 章 7～11 節にそのことが記されています。その岩に関して「彼らについて来た靈的な岩」と言われています。これはもちろん物質的な岩がイスラエルが旅をする間、ずっと彼らについて来たという意味ではありません。神は民の必要に応じて、いつでも岩から水を湧き出させました。それはまるで靈的な岩がイスラエルにいつもついて来たような出来事であったということでしょう。そのような神の守りがいつも彼らとともにあったということです。そして「その岩とはキリストです」と言われています。旧約の民イスラエルを贖い、救う神のみわざはキリストを通して与えられたものだったということでしょう。つまり彼らもキリストから飲んだわけです。旧約の民にとっても、新約の民にとっても、救いはただキリストにあります。キリストこそ旧約と新約を通じて私たちに与えられている唯一の救い主です。旧約の民も私たちと同じくキリストから恵みを受け、養われたのです。そしてこちらでも「みな」という言葉が繰り返されています。全員、靈的な食べ物を食べ、また靈的な飲み物を飲んだのです。

ところがです。その後に驚愕せずにいられない事実が述べられます。5 節にある通り、「しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました」ということです。滅びたのは少数者ではありません。「彼らの大部分」と言われています。一体どれくらいの人々だったのでしょうか。民数記 14 章 28～30 節：「彼らに言え。わたしは生きている——主のことば——。わたしは必ず、おまえたちがわたしの耳に語ったとおりに、おまえたちに行う。この荒野におまえたちは、屍をさらす。わたしに不平を言った者で、二十歳以上の、登録され数えられた者たち全員である。エフネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかは、おまえたちを住まわせるとわたしが誓った地に、だれ一人入ることはできない。」 何と当時の 20 歳以上で約束の地に入れたのはカレブとヨシュアの二人のみでした！エジプトを出たのは壮年の男だけで約 60 万人だったのに（出エジプト記 12 章 37 節）、約束の地に入れたのはたった二人だけ！まさかと耳を疑うような結果です。そしてここで効いて来るのは、先に繰り返された「みな」という言葉です。荒野で滅びた人々とは、先に述べられた恵みを受けな

かった人たちではありません。彼らはみなモーセにつくバプテスマを受け、みな霊的な食べ物を食べ、霊的な飲み物を飲みました。その特別な恵みにあずかった人々の大部分が約束の地に入る前に滅びたのです。すなわち失格者となったのです。

私たちはここから私たちも誤った安心感を持つことはできないと教えられます。新約の洗礼と聖餐に当たる恵みを日々受けていた旧約の民の大部分が滅びました。ですから私たちも自分は洗礼を受けているからとか、聖餐式を受けているから、大丈夫だろう！とは言えない。もちろん洗礼式も聖餐式も神が与えてくださった素晴らしい恵みの手段です。しかしそれらを受けていれば、あとは自動的にゴールに入ると保証されているわけではないのです。ここにそうでない実例があります。私たちを戒める実例です。私たちはここから重大な警告を受け取らなくてはなりません。新約聖書の最後の方にあるユダの手紙にも、恵みを放縱に変える人々はさばきにあうと語られた後、5節でこう言われています。「あなたがたはすべてのことをよく知っていますが、思い起こしてほしいのです。イエスは民をエジプトの地から救い出しましたが、その後、信じなかった者たちを滅ぼされました。」エジプトの奴隷状態から救われ、出発したというだけでは不十分です。その後で滅ぼされた多くの者たちがいたことを私たちは心に留めなくてはなりません。

なぜ彼らは滅ぼされたのでしょうか。5節に「神のみこころにかなわず」と記された後、6節に彼らが悪を貪ったからだと言われます。そして彼らが貪った悪とはどんな悪だったのかが次回7節以降、具体的に語られます。そこには4つのことが語られます。7節では偶像礼拝、8節では淫らな行い、9節ではキリストを試みることに、10節では不平を言うこと。詳しくは次回見ます。それらをまとめて6節で「貪り」と言われています。これは神が備えてくださったものに満足しないこと。もっと多くを得たい、自分の好きなように生きたい、自分がやりたいようにしたいと考えて、神の御言葉に従うよりも自分の欲望を優先すること。自分が中心となり、神の戒めも無視して、それを越えて進むことです。それではダメであるということです。私たちはこの実例から学ばなくてはなりません。

今日しっかり心に留めたいのは私たちの先祖の話です。旧約のイスラエルは私たちと同じく仲保者に結び付くバプテスマの恵みにあずかりました。また霊的な食べ物、霊的な飲み物を受け、キリストご自身によって養われました。ところがその彼らの大

部分は自らが貪った悪によって滅びました。ですから私たちも洗礼と聖餐にあずかってさえいれば大丈夫と考えることはできません。それらにあずかっていることは救いの絶対的保証にはなりません。神は私たちに洗礼を与え、聖餐式を通して豊かに養ってくださいますが、私たちは私たちに戒める実例から学ばなければなりません。神の戒めを越えて貪る生活に進まないように！と。私たちはこのように語ってくれるみことばからも益を受けたいと思います。次回、滅びた彼らの問題は何だったのかをより具体的に学んで、自分が主になるのではなく、神により頼んで従う者でありますように。そしてパウロと同じように「失格者にならないように」という正しい緊張感をもって神の恵みにより頼み、救いの道を歩み出しただけでなく、最後まで耐え忍ぶ歩みを祈り求め、導かれる者でありたいと思います。